AMDA ジャーナル ダイジェスト

発　行：2018 年 12 月　No.51　　定価 150 円
発行元：〒 700-0013　岡山市北区伊福町 3-31-1
認定特定非営利活動法人 アムダ：AMDA
TEL 086-252-7700　FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp
編　集：AMDA ボランティアセンター
ホームページ：http://www.amda.or.jp

自然災害が猛威　今年も甚大な被害

西日本豪雨　被災地に息の長い見守りを

岡山県内で死者・行方不明者 64 人が出た西日本豪雨は、12 月 6 日で被災から 5 カ月となりました。甚大な浸水被害を受けた倉敷市では復興に向け、住民と懇談会を始めていますが、なお数十人の住民が避難所生活を強いられています。被災後の体調悪化による「災害関連死」も出ており、冬場の寒さ対策を含め、きめ細かい対策が求められています。

モンゴル元保健副大臣から送られた 100 足のソックスを受け取る片岡総社市長（左）

倉敷市災害ボランティアセンターによると、同市真備町地区ではこれまで延べ 5 万 8 千人のボランティアが計 3 千件の依頼を完了させてきました。参加者は 7 月 15 日に最多の 2,300 人にのぼったものの、9 月にはピーク時の三分の一以下の 700 ～ 100 人台に減少しています。

同センターは「ニーズは今も変わらない。できる限り協力してほしい」と呼び掛けていますが、依然、被災者の要請に十分、応じきれておらず、今も片づけが手つかずの家屋が残っています。

岡山県は「晴れの国」と呼ばれています。降雨量 1 ミリ未満の日数が全国の県庁所在地で最も多く、瀬戸大橋が開通した 1988 年の翌年から観光や農産物を PR するためのキャッチフレーズとして使われるようになりました。

それから 30 年という月日の経過とともに「晴れの国」は被災が少ないというイメージが行政や住民の心に染み込み、油断となったのかもしれません。「災害はいつ、どこで起きるか分からない」ー。この言葉をあらためて胸に強く刻むとともに、AMDA をはじめ皆様方の被災地への息の長い見守りが欠かせません。

（広報担当参与・今井康人）

北海道胆振東部地震　緊急支援活動に参加して

発災翌日（9 月 7 日）空路北海道入りし、レンタカーにて最大震度 7 を記録した厚真町に入り、AMDA 支援農家のボランティアさん 5 名との炊き出し及び夜間対応が必要と思われる厚真中央小学校の避難所への看護師の夜間対応を行いました。

避難者から話を聞く AMDA 調整員

炊き出しでは、避難者の方から「わざわざ岡山から来てくれたん？美味しかったよ。」と喜んでいただきました。

避難所では、当初、避難者・避難所運営者共に疲れがみえる中、夜間に医療専門職が常駐する形をとることで、双方から「安心できる。」「落ち着いて運営ができる。」と幾ばくかの安心感を持っていただくことができたようで、非常にうれしかったです。

夜間対応を地元の団体に引き継いで当地を去る時、仮設住宅の建設が決まりました。まだまだこれから復旧・復興へ向けて長い日々が続きます。今後とも遠く岡山の地から経過を見守りたいと思います。

（AMDA 本部職員　三宅　孝士・赤磐市役所より出向中）

大阪北部地震　緊急救援チームが現地入り

6 月 18 日 7 時 58 分大阪府北部で地震が発生、同日 AMDA 職員 2 名が現地入り、最大震度 6 弱を観測した大阪府高槻市と茨木市の計 6 か所の避難所で巡回調査を行いました。

避難者の方からは、慣れない環境で寝られずに夜を過ごしたという声も耳にしました。地元の医療機関が立ち上がっていたことと、保健師による巡回も行われていたことから、支援ニーズはないと判断しましたが、今後もあらゆる災害に対し迅速に対応していく AMDA でありたいと思っています。　（プロジェクトオフィサー　神倉裕太郎）

地震、台風・・・海外でも災害相次ぐ

■インド連邦・ケララ州洪水被災者に対する緊急救援活動

インド連邦南部にあるケララ州で 100 年に一度といわれる大規模洪水が 8 月 15 日に発生。死者約 500 人、最大避難者数は 100 万人に上りました。AMDA はチェンガヌールロータリークラブ協力の下、被災者と一緒に選んだ調理器具などを 4 地域 198 世帯に、スクールバッグとノート 5 冊を被災した生徒 50 人に配布しました。また、現地医療団体であるセワ・バラティと協力し、インド、ネパール、日本からなる AMDA 多国籍医療医師団による被災者医療支援活動を 4 地域 512 人に対して行いました。

同州内で被災を免れた人たちは、被災者と一丸になって泥かきをしていたり、AMDA の活動にご参加くださったインド伝統医療であるアユルベーダ医師のように、支援活動に積極的に参加していたのが印象的でした。

（インド担当　岩尾　智子）

■フィリピン災害支援活動

9 月 15 日に台風 22 号がフィリピン・ルソン島北部に上陸、相次いで、モンスーンによる豪雨がセブ島を襲いました。それぞれの地域で土砂災害などが複数発生、150 人以上の人々が亡くなるなど甚大な被害が出ました。この状況を受け、AMDA から調整員 1 名が 26 日に現地入り、フィリピン大統領府との協力協定の下、大統領府職員やフィリピン空軍及びフィリピン海軍の協力を得ながら、3 地域の 5 カ所の避難所等にて計 882 世帯に対し物資支援活動を現地にて行いました。被災者の方の中には家や仕事を失ってしまった方も多く、食べ物や住む場所など今後の生活に関して不安な気持ちで避難所で過ごされている様子でした。支援を行った際、被災者の方に「支援をしてくれてありがとう」と堅く握手を求められました。一刻でも早く被災者の方々が元の生活に戻れるように願っています。

（プロジェクトオフィサー　神倉　裕太郎）

■インドネシア・ロンボク島地震緊急医療支援活動

インドネシア、ロンボク島で 7 月 29 日にマグニチュード (M)6.4、そして 8 月 5 日に M7.0 の地震が発生。最初の地震発生後の 8 月 1 日に AMDA インドネシア支部は、医師 2 名を含む第 1 次医療チームを現地に派遣、被災者を対象に巡回診療等を行いました。M7.0 の地震の被害状況も鑑み、同月 8 日に同支部は第 2 次医療チームを派遣。チームは、被災地近くの病院にて麻酔科医として手術協力、避難所での診療、物資支援などを実施しました。手術に参加した麻酔医は、手術中余震にあいながらも患者を置いていけず、病院が無事であるようにと祈るしかなかった、と後日語りました。

16 日には菅波茂 AMDA グループ代表とタンラ AMDA インドネシア支部長が活動地を訪問、食料や飲料などを現地自治体に寄付しました。

今回の地震により死者が 460 人以上、7,000 人以上が負傷と発表されています。

（GPSP 支援局総務担当　ブルックス　雅美）

■インドネシア・スラウェシ島地震被災者緊急医療支援活動

現地時間 9 月 28 日午後、インドネシア・スラウェシ島にて最大マグニチュード 7.4 の地震が頻発、加えて 3 メートル以上の津波が町を襲いました。

インドネシア支部は 10 月 1 日に医療チームを派遣、被災地の病院で手術協力を開始しました。また、第 2 次チームが食料などの物資支援を実施しました。

日本からも医療者 3 名を 6 日に派遣、うち看護師 1 名は支部で調整を、医師、看護師各 1 名は被災地にてインドネシアチームと合流し手術協力のほか、複数の避難所にて診療を実施、被災後病院に行けなかった負傷者を見つけ処置を行うことができました。

10 月 16 日に日本からの医療チームは無事帰国、その後インドネシアチームも被災地での悪天候などにより活動を中止していますが、同支部は 11 月 22 日より精神面でのケアも含めた支援を実施しました。

（GPSP 支援局総務担当　ブルックス　雅美）

被災者の絆を求めて　東日本大震災から８年目

気仙沼市南町紫神社前商店街事務局長・AMDA 参与　坂本　正人

震災から早いもので７年半が過ぎようとしています。特に、東日本大震災の後に各地で災害が続き、とても嫌な気持ちになっています。懸命な復興作業が各地で行われている事と思います。私たちは当初は５年という期間である程度の復興が出来ると思いましたが、とても無理だったのだと実感しています。

私達の商店街も昨年オープンし今年の 11 月で１周年を迎えましたが、周りの区画整理事業もまだ終わらずインフラ整備も整っておらず、人が戻って来るまでには今、少し時間がかかり、そうしている内に新しい地域での生活を始めている人達は、もう戻っては来ないという悪循環が続いています。人口も年々減少しており、住民不在の街づくりの感じが否めません。やはりスピード感をもって復興に取り組まなければいけなかったのでは、と思います。スピードというものにはお金もある程度かかる事と、人と分かりあう力がどうしても不可欠です。色々な事を想定して災害に取り組まなければならないと、改めて考えさせられた商店街１周年になりました。

また、復興公共事業の方も防潮堤の高さのミス、事業者の倒産などまだまだ周りには問題が山積みです。そんな中、商店街の人達にも頑張って頂き賑わい作りに取り組んでいます。先日は、ハロウィンイベントを開催し、大勢の子どもたちやお客様が来て下さり、私たちが目指す１つ、子つの子どもたちの集まる商店街が見えてきました。やはり、子どもたちの笑顔は素晴らしいものです。それに伴い、７年間も被災地に目を向けて下さっているアムダの姿勢には、本当に感謝しております。各地の災害を目の当たりにして、自分たちに出来る事は何かを日頃から考えていきたいと思っています。

紫神社前商店街のハロウィンイベントの様子

震災後３回目のコミュニティづくり

アムダ大槌健康サポートセンター　佐々木　賀奈子

遠野悟堂の里山祭りに雑貨を販売

現在大槌では震災後３回目のコミュニティ作りを必要としています。１回目は避難所、２回目は仮設住宅で、三回目は終の棲家の復興住宅や自宅再建した地区でのコミュニティ作りです。

アムダ大槌健康サポートセンターでは、さをり織り、木工、手芸、郷土料理、体笑教室、鍼マッサージ治療を継続しております。物作り健康作りだけでなく、お互いを気遣い、声かけをして支えあっています。手作り品の販売と各教室の広報に力を入れ、生きがい、やりがい、心身共に健康になれる憩いの場、大槌健康サポートセンターを継続していきます。私達が皆様からずっと御支援して頂いたお陰で今があります。今後は真心のお返し、相互扶助の精神を伝え続けていきたいと思っております。

復興　これから正念場

一般社団法人 Tsubomi　代表理事　大久保　彩乃

「ママのための講座・サロン」の様子

東日本大震災から７年８ヶ月が経ち、大槌町も一歩一歩復興に向け歩みを進めています。しかし、その一方で人口流出には歯止めがきかず、特に若年層や子育て世代の転出が多く見られます。実際、「子どもを安心して連れて行ける・遊ばせられる場所が少なく大槌での子育てが不安」「大槌では将来に希望が見いだせない」等といった悩みを抱える方も少なくありません。そのため、私たちは母子の居場所・遊び場の創出、若い女性のチャレンジ応援等を行っています。現在、東日本大震災への支援も減少している中で、ここからが復興の正念場だと思っています。私たちは、大槌で暮らす誰もが笑顔になれる町づくりに向け、これからも精一杯頑張ってまいります。

AMDA・赤磐市防災国際フォーラム開催

AMDA と岡山県赤磐市の共催「防災国際フォーラム」が 11 月 11 日赤磐市内の桜が丘いきいき交流センターで開かれました。2016 年に AMDA と赤磐市とが連携協定を結んで以来、今回で 3 回目となるフォーラムの内容は、赤磐市から AMDA への出向職員三宅孝士氏が 2018 年 5 月以降参加した AMDA の西日本豪雨災害被災者支援、スリランカ平和構築プログラムと北海道胆振東部地震被災者支援の報告に続き、赤磐市出身太田裕之氏の災害に対する講演がありました。太田氏は今回の西日本豪雨災害時、倉敷市真備町で被災。岡田小学校が避難所開設された際に運営のボランティアスタッフとして活動されました。被災者名簿を作成し、配慮が必要な人を把握する等の体験を通して、行政や学校だけに任せるのではなく、自治組織を設け被災者自ら行動していくことが大切だとお話しいただきました。

スリンランカを訪問した中学生と高校生の発表の様子

また後半は「AMDA スリランカ平和構築プログラム」でスリランカを訪問した中学生、高校生の活動報告がありました。プログラムに参加した赤磐市の中学生 5 名の内、11 日は 4 名で異文化体験の中で学んだ事や、日常の当たり前のありがたさについて報告、次に AMDA 中学高校生会の 4 名は、笑顔で交流するだけでなく現地の異なる民族の生徒たちを繋ぐ役割の大切さについて報告しました。同じく参加した広島県立福山誠之館高校生 2 名は平和について広島が果たす役割と国際貢献について報告をしました。最後に、生徒 1 人 1 人が活動参加の動機や活動前後の自分自身の考えの変化などを自分の言葉で発表しました。（AMDA ボランティアセンター事務局長　竹谷　和子）

ロヒンギャ難民支援、開始から 1 年

ロヒンギャ難民は、ミャンマーに暮らすイスラム系少数民族です。昨年 2017 年 8 月末以降、難民が隣国バングラデシュに大量流入したため、AMDA は 2017 年 10 月より 1 年間の予定で AMDA バングラデシュ支部と日本バングラデシュ友好病院を中心に緊急医療支援を行ってきました。主に、ロヒンギャ難民キャンプ最大のクトゥパロン難民キャンプに開設した診療所で診療、医薬品処方を行っています。また、AMDA 多国籍医師団として海外からも医療者の派遣を実施。2018 年 10 月までにのべ 35,000 人を診療しました。

ネパール人医師（左）が診察する様子

人道危機発生から 1 年が経過し、緊急期の支援だけでなく難民の未来を見据えた長期的な支援に移行する時期となっています。そのため、2018 年 11 月、現状把握と今後の活動の可能性の検討・調整のため日本とネパールより医師を各 1 人、AMDA 本部職員 1 人を現地に派遣中です。また NPO 法人 TMAT とも合同事業とすることが決定し、医師の派遣を予定しています。2017 年 8 月 25 日以降新たにバングラデシュに流入したロヒンギャ難民は 73 万 3 千人、それ以前からの人数を合計すると、推定難民数は 90 万 1 千人となっています（2018 年 11 月 15 日現在 UNHCR（国際連合難民高等弁務官事務所）発表）。

（バングラデシュ担当　橋本　千明）

編集後記

国内外で猛威をふるった自然災害―。AMDA は今年も被災地への職員派遣、情報収集、ホームページへの「速報」掲載…と多忙な日々を送りました。

特に西日本豪雨の際は、被害が出た翌日の 7 月 7 日から約 2 カ月間、緊急救援の職員が現地合同対策本部と被災地に張り付き、AMDA 本部内にいる後方支援職員はわずか 2 ～ 3 人の状態。多くのボランティアさんの力を借りて、乗り切ることが出来ました。「救える命があればどこへでも」―。AMDA の基本理念ですが、睡眠時間も削り猛暑の中、歯を食いしばって頑張った同僚を誇らしく感じます。

今年も 1 年間、皆様には大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。

（広報担当参与　今井康人）